||||紹　介||||

森田　実『自民党の終焉－民主党が政権をとる日』

澤　　喜司郎

（Ⅰ）

政治評論家の著者は「自民党の終焉が近づいている。自民党には，もはや，復活する倫理的力も，知的な力も，人的パワーも残っていない」「民主党が政権を獲得する日はそう遠くない。自民党から民主党へ，政権が交代する日は近い」「政権交代なき民主政治はありえない。今までの日本には選挙による与野党間での政権交代はなかった。日本は，形式は民主主義国家だが実質的には民主主義国家ではなかった。この壁が，2007年7月29日の参院選で破られた。破ったのは小沢一郎代表が指揮する民主党である。次の衆院選が『自公』対民主党の2大政治勢力の真の決戦場である。私は，民主党が勝利して政権を獲得すると予測している」「政権交代が実現すれば，古い腐敗した官僚主義政治の支配から日本国民は解放される。日本国民の新たなエネルギーが解き放たれる。日本は新しい未来に向かって前進することができる。政権交代の時が確実に近づいている」という。

そして「時代の潮流が変わったのである。民主党と参議院が新たな政治の先導役になった。私は本書において新しい政治の流れを分析する」としている。

なお，本書の構成は

第1章　日本政治激動の予兆－政権交代の条件が整った

第2章　「自公」から「自公 VS 民主」時代へ－「二大政党制への道が開いた」

第3章　否定された小泉構造改革路線

第4章　小泉政治の"興隆"と"破綻"を振り返る

第5章　小沢と安倍，どちらの訴えが国民に届いたのか

第6章　与野党の財源論争を検証する！

第7章　民主党・国民新党の共闘で小泉構造改革路線に決別を

第8章　外交なき国の外交論争－従米国家からの脱却

第9章　政治をここまでダメにした世襲議員たち－自民党長期政権の弊害

第10章　民主主義を忘れた自公時代錯誤内閣に起死回生の妙薬はない！

第11章　自公支配から脱却した参議院の本来の使命を取り戻す
第12章　民主党政権の可能性はホンモノか？
第13章　運命尽きたり！自公連立政権
第14章　小沢民主党の「中道保守主義」を解き明かす
第15章　憲法第9条改正をめぐる政治情勢の変化
第16章　従軍慰安婦発言で歴史認識の甘さを露呈した安倍前首相
第17章　「民主党に政権を任せられるのか？」を検証する

であり，本稿では勇ましい論題が並べられている本書の内容を簡単に紹介したい。

（Ⅱ）

第1章では「私は自民党の時代は間もなく終わると予想している。自民党にはもはや政権を担いつづけるだけの力量が残っていない」とし，政権交代の条件として「第1に，いままでの政治権力支配に対して，多数の国民が不満をもち，既存の政権の退場を望むようになること。第2に，政治権力に国民の支持をつなぎ止める力と政策がなくなること。第3に，代わりうる新しい政治勢力が成長していること」をあげ，「民主党は小沢一郎代表のもとで成長し，政権を担当する能力をもつ政党に成長した。長い間政権交代なき名目だけの民主主義だったわが国に，政権交代を可能にする条件が整った」としている。

第2章では，7·29参院選で「日本は政権交代可能な民主主義国家に生まれ変わった。この変化をつくり出したのが民主党の大勝利であり，自・公両党の大敗北である」とし，「民主・社民・国民新の3党共闘態勢が固まれば，野党主導の参院は運営が安定」し，「参院の民主党主導（プラス社民党・国民新党）体制は維持され」，この6年間に「民主党（プラス社民党・国民新党）が衆院選で過半数の議席をとり，政権を握る可能性は高い」「55年体制下の自民党のような安定政権になりうることは十分にあり得る」という。

第3章では，参院選投票日の前日に「全国紙朝刊にいっせいに掲載された小沢一郎民主党代表の『拝啓　国民のみなさま』と題する一文」が「国民から強い支持を受けたことは，小泉構造改革が日本国民によってはっきりと否定され」，「日本国民は，小泉構造改革の真の推進者である米国のブッシュ政権に対しても『ノー』をつきつけ」，「安倍前首相は，この小泉構造改革を転換できる立場にいながら，転換しようとしなかった。参院選での大敗北は，この結果でもある」ばかりか「小泉政治の敗北を意味している」としている。

第4章では「小泉政権はマスメディアと広告を使って，一時期は高い人気を確立したが，やったことは，国民にとって百害あって一利なしというべきひどいものであった。小泉政権は詐欺的政治を行った」が，小泉構造改革によって「斬り捨てられた地方住民や『負け組』が小泉構造改革のおそるべき本質にやっと気づいたとき，小泉首相は表舞台から去っていた。小泉氏は逃げ足が速かった」「権力欲だけが過剰で無能な安倍氏を後継者としたことによって，小泉氏の逃走計画は成功した」という。

第5章では「安倍首相は選挙戦を通じて『美しい国』を叫びつづけたが，この主張も日本国民の心には響かなかった。そもそも『美しい』という言葉を政治スローガンに取り入れたこと自体に問題があった」「安倍首相の『美しい国　日本』の政治スローガンは，日本国民から，まともに相手にされなかった」が，「小沢一郎代表ら民主党指導者は，大多数の国民の最大関心事が生活の問題であることをしっかり捉え」，「小沢代表は『国民の生活が第一』の主張によって大多数の国民の心を掴んでいた」としている。

第6章では「政府，財務省は，この期間（小泉政権期…筆者加筆）の日本の経済政策の中心に財政再建を据え，財政再建には，多くの犠牲をも辞さないとの態度をもって取り組んできた」が，「財政状況は2001年度よりもさらに悪化している」「国民生活を犠牲にし，大多数の国民を貧困化したが，財政赤字を増やしてしまった」とし，財政が悪化した要因を究明することなく，「アングロ・サクソン型自由競争主義の導入の失敗は明白である。この点を含めて経済政策のあり方の全面転換を図らなければ，財政再建も日本経済の再生も不可能である」という。

（Ⅲ）

第7章では「小沢一郎氏が民主党代表に就任する以前の民主党指導部は，小泉構造改革に共感をもっていた」「小泉首相を支える役割を果たしたのが，民主党内の構造改革派」で，かれらは「小泉首相によって弄ばれた上で切られ…まだこのことに十分に気づいていない。愚か者につける薬はないのかもしれない」し，「いまだに小沢路線に転換することができない者がいる」「民主党の大勝利は，小沢一郎代表が，民主党内の小泉構造改革支持派を抑え込んだことによって生み出された」としている。

第8章では「独立国には外交がある」「だが，日本に外交はない。日本の外交を行っていたのは米国政府の対日政策担当者であった。日本が従米国家になってしまって

いたからである」「日本外交は事実上破綻してしまっている」が，「2007年7月29日の参議院議員選挙を機に独自の日本外交が復活する」「外交不在状況は参院選における民主党の大勝利で変わり始めている」「これからは民主党の外交政策が，日本外交を抑制したり動かすものとなる」という。

第9章では，昔の政治家と現在の政治家を比べて「小型化しただけでなく，精神が変わった。背景には，政治家の世襲化と，政党の官僚化，政官財の癒着とくに閨閥化がある」とし，「最近の政治家は国民を上から見下ろすタイプが増え」，この傾向は「とりわけ，2世，3世議員と中央官庁出身者に多い」「政治家の世襲化は日本政治の劣化の最大の原因の一つで」，「世襲化は民主主義に反している」と批判しているが，「2世議員にも小沢一郎氏のようなすぐれた政治家がいる」と小沢氏は例外だと強調している。

第10章では，「参議院の存在意義は政府と衆議院をチェックするところにある」「自民党一党支配，自公連立支配の時代においては，参議院は衆議院のカーボンコピーと揶揄されつづけてきた」が，「参議院議員選挙の結果…本来の政治権力と衆議院へのチェックの機能が蘇ることになった」とし，また2005年の小泉郵政解散・総選挙は「明らかな憲法違反」であるため，「自公連立政権は可能な限り早く衆議院を解散し総選挙を行うことによって…日本の政治の抜本的出直しを図るべきである」という。

第11章では「民主党参議院議員会長が民主党の最高意思決定機関に入ったことは，今後参議院が与野党の攻防の主戦場になることを暗示している」「議長に民主党出身の江田五月氏，議院運営委員長に西岡武夫氏が選出されている。参議院における民主党主導体制は確立した。これは何を意味するか。参議院の政治権力からの自立である」とし，「参議院はあたかも小沢民主党という解放軍によって行政府と衆議院の支配から解放され自由を得たようなものである」としている。

第12章では「民主党は，初期においては…一種の選挙協同組合型政党だった。この時期の指導者は鳩山由紀夫氏と菅直人氏」で，「この頃の民主党のイメージが『頼りない政党』だった。だがこれはあくまで，第1期の民主党の姿であった。第2期は2006年4月に小沢一郎氏が代表に就任して以後の民主党で」，小沢代表就任によって「党の体質も『頼りない党』ではなくなった。菅直人氏も鳩山由紀夫氏もたくましくなった」「民主党全体が大人の政党に成長した」と，小沢氏が民主党を成長させたと強調している。

（Ⅳ）

第13章では，「自民党と公明党が連立政権を維持しなければならない大義名分はない」「それでも連立を維持するのは政党政治の原則に背くものだ」「連立は解消すべきである」としたのち，「ブッシュ共和党の日本支部」となった自公連立政権ではなく，「国民は真面目で『まともな政治』をめざしている小沢一郎民主党代表に日本の未来を託そうとしている。国民生活重視の日本型中道保守主義を担うのはもはや自民党ではない。今後は小沢民主党が国民重視の中道保守主義を担うのである」としている。

第14章では「人道主義に立つ現実的中道保守主義――これが民主党の小沢政治の基本である。これに対し『ブッシュ・小泉・安倍』の政治理念は強者の論理に立っている」ばかりか，「本質的に保守主義とはいえない異質の政治理念である」とし，「真の日本の保守主義を担うことができるのはもはや自民党ではない。小沢一郎代表の民主党」で，「すぐれた伝統を尊重し，健全な道義と常識の上に立つ謙虚にして人道主義的な真の中道保守主義の担い手は，小沢民主党と国民新党に交代した」という。

第15章では，「参議院においては2007年7月29日以後，憲法改正発議は事実上不可能になった」「憲法改正反対派が大量に当選した今回の議席状況が維持される6年間に，憲法改正発議を行うことはきわめて困難になっている」「国民投票法は役に立たなくなった」「民主党が反対しているなか，強引に自公2党だけで成立させた法律を，民主党主導の参議院で使うことはきわめて困難になった」「これから日本国民は，堂々と，第9条に誇りをもって国際社会に向かっていくべきである」としている。

第16章では「安倍前首相が従軍慰安婦問題に口を出したのは大失敗だった。歴史を見直そうとする一部の右翼思想家たちの活動に政治家は加わるべきではない。安倍首相は余計なことをした」とし，「『従軍慰安婦は歴史的事実に反する』と言う者がいたら，その人は戦争のことをほとんど知らない人である。そうでなければ異常な人である。戦争中を知る者なら従軍慰安婦について軍の関与はなかったなどという無神経な話はとうていできないであろう。具体的な政府文書があるかないかは，どうでもよい問題である」という。

第17章では「小沢一郎代表は，参院選の勝利により，民主党の『神』のごとき存在になった」としたのち，「政権交代可能な二代（大の誤植…筆者加筆）政党制の確立は，真の民主主義＝国民主権確立への道である。国民が政権を決めることがで

きるのが，すなわち国民主権であり，民主政治である。いままでの日本は民主主義国家を自称しながら真の民主主義国家ではなかった。政権交代がなかったからである」「次の総選挙によって政権交代が実現できたとき，真の民主主義が誕生する」と結んでいる。

(Ⅳ)

本書は，徹底的に小泉元首相と安倍前首相を批判し，小沢民主党代表を「神」と讃えることに終始した書物で，ここまで徹底していると痛快である。しかし，小沢氏を盲目的に信奉する著者の主張には，それゆえに矛盾する点や非論理的な論点などが多くある。たとえば，「いままでの日本は真の民主主義国家ではなかった」「次の総選挙によって政権交代が実現できたとき，真の民主主義が誕生する」とする主張には問題があるが，著者が小沢一郎信者であることを思えば納得もできようが，従軍慰安婦問題についての「具体的な政府文書があるかないかは，どうでもよい問題である」という主張については政治評論家としての著者の見識や常識が疑われる。このような発言は，文化的あるいは進歩的と称する左翼人が議論で窮したときに使う言葉と同じである。

また，著者は「政権交代可能な二大政党」という言葉をよく使っているが，それが民主党と自民党を指し，小沢民主党を「中道保守主義」と規定するならば，二大政党制を前提に考えれば，対立軸としての自民党は保守主義ではなくリベラリズムだと主張しているように思える。また，小沢氏が「中道保守主義」であるとしても，小沢氏を除いた真の民主党はリベラリズムであるとするのが一般的な理解のゆえに，いずれ小沢氏が民主党は崩壊させることになろう。もし，そうでなければ二大政党制ではなく，民主党はいまも著者がいう「選挙協同組合型」の政党にすぎないといわざるを得ない。

以上，本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが，浅学非才な筆者には的確な紹介ができず，また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり，この点については著者のご海容をお願いする次第である。

（角川 SSC 新書，2007年10月，190頁，定価740円+税）